

---

# 無気力で無関心なボクと殺人少女

S.c

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無気力で無関心なボクと殺人少女

### 【Nコード】

N5543M

### 【作者名】

S.c

### 【あらすじ】

生きること無頓着なボクこと、コーくんはある少女に出会った。そして、血、血、血。

ボクらは何に生き、何に死ぬのか？

そもそも、生きているということは何なのか？

## §0 始まりの終わり

§0

目上に見えるのは白く……白い二つの二重丸。それは天使のわっかに見える——ません、少なくともボクには。

大体、神という存在も信じていませんし、そんな天使が迎えに来るような優美な旅立ちもまだ迎えたくありません。大層な生き方もしたくありませんが、ボクは死にたくもないのです。

昔、人に言われたことがあります。

「お前は、『無気力』『無感動』『無関心』だな」と。

「この人でなしがあ！」とも言われたこともありました。しかし、それは生きることにも死ぬことにも無関心で無感動なボクにはどうでもいいのです。

……何にせよ、これはどうでもいい話なのです。

## §0 始まりの終わり（後書き）

続くのだろうか、少し不安、あんまり設定も練れてないし。  
でも、キャラクターは思い浮かんでるからダイジョウブ（多分

20100910

携帯からの皆様に見やすいように改行を入れました。

## §1 無関心の関心

「あー……たるい」

ボクにとって、学校の机とは第二のベッドに過ぎない。それに自分で勉強していたほうが効率がいい。要はテストでいい点を取ればいいのだ、そうすれば万事万全。大人なんてそんなものだ。

一時間目、教壇では担任が数学のグラフの解説をしている、U字型のあれだ。予習して理解しているので、ボクは机に突っ伏すことにした。眠気は生理的欲求、それに逆らうなんてとんでもない……とか何とか理由をつけてボクは眠ることにした。

………

「ねえ、××君？ 教室閉めなきゃなんないんだけど」

「！」

今日の日直だった娘に謝辞を述べ、そそくさと立ち去った。

それにしても吾ながら寝過ぎだ。始業から就業まで寝てるって……一日の半分は寝ている生活というのも人として考えものだな。

と本気では思っていないどうでもいいことを考えつつ。宿舎への帰路に着いた。高校に入って三ヶ月がとうに過ぎ、ある意味マンネ

リズムとなった帰り道というのは無感動、というよりボクの興味をそそらない無関心というほうが近く、何故今になって無関心になったことを語りだそうというのも今回このルーチンワークのような下校にも変化が現れたからである。

## §1 無関心の関心（後書き）

次話でヒロイン登場！

天然大ボケ野郎というのは僕の得意技ですけど、シリアスが無くなるのはきついでバランス調整しつつです。。。

9／5設定上の修正

20100911

携帯からの皆様が見やすいように改行を入れました。

## §2 黄昏

ボクは学校という退屈な場所からのある『一つ』の脱出経路、つまり正門を『一人』で出た。わざわざ正門から出るという当たり前のことを言うのもどうかと思われるが、この正門から出るという行為はこの学校では普通ではなく、異常であることを知ってもらいたいと思う。

まず第一条件、ボクの通う霧ヶ丘高校において正門と正反対の方向に裏門がある。が、正門というのは名ばかりであり、駅に面した裏門から登下校する生徒が多いのが現状だ。しかし、理由はそれだけではない。それが第二条件だ。

### 『殺人事件』

当たり前のようなフレーズ、なんだか……聞き飽きた。よく、ニュースでも取り上げられる怨恨だの、突発的だの、「殺すつもりはなかった」だの、そんな自分に危機が及ばないようなものでなく。

(恐らく) 無差別に、(恐らく) 理由なく、(恐らく) 計画的に、  
(恐らく) 明確な殺意を持って――。

理由は犯人が捕まっていけないので分からないけど……多分。

そんな危ないご時世、殺戮の起こった正門側の町へ行くのはどう



だろう？ 霧ヶ丘高校は私立だ、よって他府県から来る生徒は電車に乗って帰る。だが元々、この町に住んでいた生徒は町へ帰るより仕方ない、女子ならば親が車で送り迎えし、男子であつても仲間とつるんで帰る。

『絶対に一人では帰らない』、命が大切なのであれば――！

――命は大切？ ボクもいい言葉だと思うよ、否定はしない。

ボクは一人で自転車を押しながら、帰る。命は惜しいと思わ……  
やっぱり少し惜しいけど。

第一の殺人が起こってから、すでに一週間経つ。一人で帰つてもなにも起きない、そりゃ明るい内はないって犯罪は晩に起こるものだろう？ というのはボクの甘い考え。

でも黄昏時が危ないのは確かかも知れない、意識が体から一つ間を置いたように自分の行動に意思がなくなる感じ、注意力が低下し何もかも橙色に染め上げられる。

そういえば、ボクが校門を出た途端、自転車がパンクした。それも両輪とも、何かの嫌がらせか？ とか思うけど生憎ボクには恨まれる相手もないし、恨む相手もない。人には興味がないから。

しかたなく、ボクは自転車を押して三十秒、人のよさそうな店長

の居る、校門前の自転車屋に行った。



「大丈夫なのか？」

店長は聞く。

「もう、暗くなっちまうぞ」

「いえ、大丈夫です。すぐそこですから」

「なら、いいけどよ」

随分と時間が経ってしまった、空はもう橙色に染まっている。それでもボクは急がずゆっくりと自転車をこぐ。

悪い予感しかない。

## §2 黄昏（後書き）

くぎゅう、ちかりた。

この後の展開にも悪い予感しかしないなあ（△、\*ゞ）テヘッ

### §3 殺人少女

……全くボクは死にたいのだろうか。否、死にたいはずはないのだ。ボクは最初にそれを否定したはず。では何故、物騒なこの農道で自転車をゆっくり押して歩いているのだろうか？ 答えは至極明快。無関心、無気力、無感動の三無主義のボクは刺激を求めているのだろう、睡眠の欲求のように、極端に言えば殺人衝動のように（もつとも、これは言いすぎであるが……）。

——結果的にボクの無関心ぐらいは、刺激されるけど、それは後の話。

そして、案の定である。素人でも分かるような気配を背後に感じたのは学校を出てから十分ほどした後のことだ。——ボクの住む町外れのアパートは田んぼの中にぽつんと取り残されたように立っている、不便性ばっちりの超優良物件である——突き刺すような視線、例えるなら教室で衆目の注目を集めたときの三倍くらいの圧倒的な意思が突き刺さっている。

振り向けなかった。

恐ろしかった。

……沈黙。

ボクは意を決した。

スタンドを立てた。

そして、振り向いた。

対峙した。

「？」

思い描いていた像とは少し違った……いや、方向性が180度変わった人がそこに居た。

男↓女

狂気↓正気？

黒い服↓白いワンピース

意思の塊のようなその眼は、死んだ眼というよりもむしろ生き生きしていて、セミロング

の髪は彼女が動いたびにさらさらと追従した。人懐っこそうに浮かべる笑顔はこの状況でなければ見とれるより仕方ない。殺気を放っている”以外”はただの一般人のように見える。が、残念ながら彼女が例の事件の犯人だと特定するのは見たただけですぐに分かった。

なぜなら……

白いワンピースは紅い血でエキゾチックに塗られていたから。

「なっ——！」

殺されるためだけに存在するモブのような科白、ボクは死にたくない。

「な、何のようだ？」

若干声が震え、心拍数が上がった。モブはモブなりに聞くことがある。殺される前に自分

は何がために死んでいくのか知る権利は当然あると思った。それは彼女には緩慢なことだったらしい。

——微笑が笑みに変わった。生物的危険を覚える、そんな見事なスマイルだった。手にはどこから取り出したのか露骨なサバイバルナイフを持っている。

もう一度言おう、0円ではもったいないスマイルだったと。

「あなたは似てるもの……」

私の兄に、そう小さく添えた。

「!？」

で何故殺されるのかの理由が分からない。ボクは通りがかりの一般人だ。容姿が似ているからだけで殺されるというのだろうか。

「それも理由かもしれない」

「かもしれないって」

「『地球のどこかで貴方に会った』ぐらいの、かもしれないさよ」

「出会い頭殺人!？」

「っ……口が滑った……。殺す相手に情けなど、不要!」

白と赤のツートンで塗り分けられた少女はナイフを振りかざす。  
対峙した距離からだ

たった二、三步の場所逃げられるような距離ではなかった。刺さった痛そうなナイフ、死ぬかもしれない、傷つくだけですむかもしれない。

どちらにしるナイフは――――。



### §3 殺人少女（後書き）

現在、三件のプロットを同時進行中。

これとあれとそれです。（何？

公募とか終わったら公開予定。

あと、この作品で長編書きたくなってきた。

201090911

携帯からの皆様が見やすいように改行を入れました。

## §5 レモンの香

ナイフは――――。

振られなかった、刺さることも無かった。よって、自分の血で溺れることも無かった。

トスツとナイフは地面に落ちた。勢いづいた少女の体は前向きに倒れてくる。よなりと倒れてくるのを慌てて両手で受けとめようとする。だが、その必要は無かった、少女はボクの胸の中に飛び込んできた。柔らかい、そして鼻腔を覆う血の匂いのなかにレモンの爽やかな香りがした。あまりに場違いなそれはこの場面では何の感想も持たれない。

考える必要が無い。

思うことも無かった。



殺人少女（どうみても）は倒れた。ボクの手中に抱きかかえられように。そして、それは今……ボクのアパートに居る。

・質疑応答

Q どうしてここに？

A 近くに家が無かった。

Q どうしてあなたが連れて帰った？

A 警察に出したら間違いなく拘束だったからね。

Q じゃあ、つきだせばよかったのに。

A (長考)

Q 答えは？

A ”関心”があつたから……かな。

さすがに、自転車を押したままではつれて帰れなかったので、自転車はその場に置きっぱなしだ。ごめん自転車、でも大丈夫きつと

盗られないから。だって、人通らないし。

前向きに抱きかかえるか（要するにお姫……略）、後ろに背負うか、どちらにしろどう考えても不審者にしか見えない——ボクじゃなくて抱きかかえているほうをだ——

背中がからレモンの香りがする。血の臭いはとても消せるものではないが、多少なりともなまなましさが相殺されている。この香りは服というよりこの少女自身から香っているようだ。突然口の中がすっぱくなった。

「ただいま」

誰もいないけど、形式的に。もつとも今回はこの家の住人じゃないのも一人いるが……。西日の差す部屋はうだるような暑さだった。最低限の装備しか整えていないこの部屋にはクーラーというものは存在しない。あるのはただ扇風機のみ。

「あああああああああ」

扇風機って声が変わって面白いね、じゃなくて。現実逃避はもうやめようよ、自分。

とりあえず、殺人少女からはサバイバルナイフを取り上げた。かなり重量がある、こんなものを振り回そうとしていたこの娘は何なんだろうか……いや殺そうとしたのだけどさ。この娘が起きたらどんな反応をするのか、ボクの関心事はそこだった。殺人者の心理というのも気になるではないか、もちろんボクは自分が殺してまでそれを知ろうとするほど、自分に優しくないものではない。異常心理を想像することはできない、なぜならそれは『異常』な心理、平常者には分らない。

……ボクの三無主義に反するなこの台詞、やはりその場のノリでことを考えてはいけない。世の中の闇を知ってどうする？ それ  
がボクの三無主義。今回は例外的だったのだ、普通ではありえないイレギュラーな要素『ストーカー？』所か、殺されかかった。自慢にならないが、ボクの間関係の輪はとても小さいものだ。クラス  
の者の名前は知っていても、その人物のプロフィールまでは知ろう  
とはしなかったからだ。人に怨まれるようなことはしない。だから、  
人からは怨まれないし関わられないものと思っていた。

だが、その結果がこれだ。目を瞑ってまた開けても、頬をつねっ  
ても消えない、白色の少女（アクセントに赤もあり）。

殺人には何らかの動機があると言われる。ボクの場合、それは  
一体何だというのだろうか。

『あなたは似てるもの……私の兄に』

ボクには妹がいる。だが、今は実家だ。人違い殺人（未遂）だったのだろうか、謎はただ深まる。

「レモネード飲みたいなー。キンキンに冷えたやつ」

だー、疲れた。

「私はあったかいほうだけどね」

「暑い夏なんだから、どう考えても冷たいほうが……って」

思考の海を泳いでいる間ずいぶん時間がたったようだった。殺人少女復活！ 喜ばしいよ涙が出る。

「えーっと、誰？ ああ、さっき殺りそこねた子か。倒れてたところに放置していかなくてくれたのはありがたいがとうだけど場合によっちゃあ」

と、目の前の彼女は腰のホルダーの『求めるもの』《サバイバルナイフ》を探る。

「！」

キツと睨み付けられる、死線デッドラインと呼ぶに相応しい視線。それはつい先ごろ見せたものと同じ、殺人衝動が籠められたもの。

「何故、警察に突き出さないの？ それとも部屋に連れ込んで私を陵辱する気ですか。その場合私は私刑リンチにあなたをかけますが……」

抵抗するというよりもむしろ、喰いに来る。圧倒される。

「じゃあ、私は帰らせてもらいます……」

そのとき、ピンポンと間抜けに滅多にならないチャイムが鳴った。

「警察ですが、この家の方はいらっしゃいますか？」

## §5 レモンの香（後書き）

ん！ キャラが走り出した！？



## §6 コーラ

チャイム何故お前は鳴る？ お前は死んだのでなかったか？

思えば、親からの仕送りも集配所へとりにいくような辺ぴな土地だし、あたりまえっちゃあ、あたりまえだけどさ。友達も居なきや使しようが無いじゃないか。

思えば、僕って結構悲しいやつなのか？

……否定できないな。

「いますよね、開けてください」

僕の名字を何度も呼ぶな。嫌いなんだ、名前って。

いやだ絶対いやだ。開けてたまるものか。

「どうしたの、開けないのかな？ 君ー？ 私は別にいいんだよ」

「えっ、いいのか」

「うん、だってお巡りと君を片付けるから」

「……」

「や、や、別に心配しなくてもいいよ。お巡りさんは殺さないって、だって不可抗力でしょ？ あの人たちの仕事なもの」

「僕は殺すのか」

「うん♪」

報われない人生だった気がする。いや、報われている人生が何かなんて分かったもんじゃないけどさ。ってか人って一生しか生きられないのになんで人の人生と比べたりするんだろうな。

人の性さがと言ったらそれで終いだけど。

「で、どうするわけさ。警察って血の匂い嗅ぎ分けられるのか？」

「そうじゃないの、犬とも言おうしね」

「それはたとえの問題だと思うが」

「そっかー。それもそうかもしれないね。モハメド・蟻<sup>アリ</sup>は蝶だもん。  
人を見かけで判断するのは良くないかー」

「蜂でもあつたけどな。蝶のように舞い、蜂のように刺すってね」

「そう言えば、日本蜜蜂って一度敵をさすと死ぬんだって」

「唐突に関係ないな、その話。いや、その前に脱線していたが」

「私は、スズメバチだから。何度でも人殺せるけどね、プギャー」

「笑い事じゃねーなー、オイ」

「あつ、そうだ、私のナイフって毒し込んであるんだよ」

「って、おおお、おい」

制服のズボン、その後ろにベルトで挟んで止めたサバイバルナイフ。

思わず背後を手で確かめてしまった。アウチッ!!

少女もそれを見ていただろう、羨望するものが手に入った子供のような目で僕を見る。悪戯は駄目よ、見たいに軽く微笑んで。

背筋が凍りました、ハイ。

殺人少女は正面からそっと抱きつくように、絡めるようにして僕の肩に頭をのせた。華奢な体軀は重さをほとんど感じさせない。正面からこうも抱きつかれているのに何の感慨もわかないのは少女の体格が原因である。

口に出していったら、そのまま骨まで碎かれそうだなアナコンダみた。

「あつ、そこにあるんだー、私の相棒。ねえ……取って……いい……よね？」

それどころではない。

一音、一音、口が開くたびに耳に吐息がかかる。

こいつ……

そんなこなしているうちに、背後に手が回される。

ベルトにさした、剥き出しのナイフがすっと抜かれる。

腰の安心の重量感が消えた……

恐怖が再開した……

そっと、殺人少女は身を引くと同時に、ナイフを鞘に収め、そのまま手にもっている。銃刀法とかは全く気にしない子のように。

「どうだった……かしら？」

「どうって？」

「照れるじゃない」

「お前のは小さくて……」

「小さい？ 誰の」

「正直な感想を言う。マニアが喜びそうだ」

「確かにマニア好きよ、私の。でも小さくはないんじゃない？ も  
しかして服の上からだったからかしら？」

「生はいいです、遠慮します」

「ひんやりとして気持ちいいのよ、生身だと。冬とかにしていると  
お腹壊しそうになるけど」

「え？」

「どう、この刻印。ここにシリアルナンバーが記されているでしょ  
？ 有名な刀匠が限定生産したものなんだよ。特にこの人は日本刀  
の職人さんだから切れ味も良くてー。それで、それでね……（ナイ  
フの話が延々と続くので割愛）」

「さて、お巡りどうしましょうか？ 煮る？ 焼く？ 痛める？  
潰す？ 切る？ 刺す？ 刻む？ 殺る？」

「煮るは駄目だ。ここには風呂が無い」

「何ですと!？」

すまん、ボロアパートで……ってちっがーう。僕の言いたいことはそうじゃなくてさ。

「殺すな！ 傷つけるな！」

「もしかして、じゃあ爆破？」

「僕の家がっ」

貸家だけど。

「ここはやはりまず落ち着くべきね」

「なんかお前、びっくりするほど落ち着いてるな」

僕は戦々恐々だけど。

「飲み物頂戴。喉が渴いてきたから、レモネードよろしく」

「はいよ……」

僕も好きで従っているわけじゃない。ただ……あのナイフが怖い。自分の失態ながら、相手に再び武器を与えてしまったのはミスチョイスだった。

た。何とかせねば……

冷蔵庫を開ける。ポツカレモンは……あった。レモンを搾った方が断然香りはいいのだろうけど、とか思いながらコップのなかへ振りかける。

「ハイ、どうぞ」

「何だこの、茶色い汚い飲み物は」

「ペプシだけど？」



「おぞましい、下民はこんなものを飲むのか……」

「何者だよ、庶民をバカにするんじゃない」

「このアパートを見てつい優越感が湧いてきて」

「あっ、そうだ。まだあんたの名前聞いてなかったわよね？」

「僕は名前は嫌いだ。誰にも教えないし、呼ばれても答えない。ファミレスでは名前はいつも神だ」

「痛い子だなー。神様って呼ばれたいわけね。でもそれ一人で行ったのよね」

「何故に？ エスパーか」

「だって友達いないでしょ？」

「……………」

「私はちゃんと殺す者の生活は把握しているの。それで、行動の条件に一致した人つまり私が一番似ていると思った人を殺すことにしてる」

「で、サンプル数は？」

「十人」

「どんな、判定基準だよ」

「私の独自の評価方式で百点満点の減点式、ちなみにあなた三十点」

「に、似てねー」

「それで、あなたの名前だけど」

「僕は言わないからな」

「じゃあ、コーラ君ね」

「ひっでえ」

「だってあんなひどいもの、私によこすから」

ポツカレモンは中身がありませんでした、残念。だから、ペプシだったわけだ。

「全国のペプシファンにけんか売ったな。さてはお前コカ・コーラ派かっ」

「残念、ガラナ派」

「北海道民!?!」

てなわけで、あだ名はコー君となりましたとさ。

## §6 コーラ（後書き）

更新が遅れて申し訳ない、  
お氣にに登録して頂けると執筆スピードが毛を生やした程度に上がります。

それにしてもお巡り無視し続けてるけどそろそろ出してあげなきゃ  
www

コー君の名前の由来のお話でした。

201090911

携帯からの皆様が見やすいように改行を入れました。

## §7 無感動だ、無感動。

前回から、どうやら殺人少女は北海道民だったらしいってことは分かったわけだ。北海道よりこの地方の方が田舎だけどなっ！ 大体、北海道って言うのは日本の最北端にあるわけ

だし、覚えやすそうなものだがここはどうだ？ 何の特色も無い、あるのは蜜柑がやれ日本一だ、日本一じゃなくなった、あーだこーだだしな。

ところで、前回ってなんだろう？

……まあ、無関心な僕には関係ないけどね。

さて、ペプシも飲んだ。あだ名がコー君になった。ナイフを取り返されて、再び状況が不利になった。

あと、何を残していたかしら？

「おい、開けるぞ！」

あつ、そうだ。お巡りさん忘れてたっけ？ 開けるってどうすのかな、刑事ドラマ風に言うとかドアを蹴破るっていうシチュエーションが鉄板だけど……

「用が済んだら適当に鍵は返してくださいね」

「あつ、ども。スイマセン。あとで、返しに伺います」

大家さんが鍵を貸したみたいだね☆ なんていうか公権強しって感じ。無関心を装ってくれたらよかったのにな、あの大家さんなら仕方の無いことかもしれないけど。なんというか、ルーズな感じだし、住人の顔も知らないだろうし。盗られて困る物（＝住人？）は無いからだろうな。

「ねえねえ、コー君。なんか怖い」

猫を被ったような声で擦り寄ってくる少女。あなたの方がよっぽど怖いんですけど。

と、肩が震えているのかこの娘は？ 何故に？

「震えてるけど？ 押入れに隠れる？」

某青ダヌキのノリで。

「い、いやよ。く、暗いのは。あと狭いところと広いところと鍵の掛かった場所と尖ったもの  
のとヒト類と、高いところと、それから……」

ん？ 色々矛盾点があるんだけどな。特に先端恐怖症と対人恐怖症のところ。いいのか、設定が甘いのでは。設定って小説的だな、オイ。こんな日常を書いてなにが楽しいんだ。今では非日常になっ  
てしまったが……哀愁じみしてくるのでここから先はカットカット。

「布団を敷いて潜り込むのはどうかな？」

ちょっと見上げる感じで訊ねて来た。

コイツ、心得てやがる。と冗談はさておき。

「“お励みのところをスイマセン”的な感じか。ってバカ。初〇〇  
の概念は無いのだろう  
か」

「えっ？」 「しまった心内語をついつい口から出してしまった」「  
ええっ？ 寝ちゃえばいいかなーって思ったんだけだけどな、  
おかしかったかなあ」「いえいえ、なんだかんだで好物です」「え  
っ！ それどゆこと」「心中お察してください」「？」

と小声でトーク、こんな状況でなければ諸手を上げて喜ぶんだけどなーと。

でも、一体全体どうすんだろう？ この状況、前門に狼、後門はナッシング。要するに一方通行。玄関からでないと出れませんからね集合住宅ってのは。

ガチャリと鍵が噛み合い扉が開く。少女は僕の隣まで間合いを詰め玄関からの位置では分からないように、僕の背中にナイフを突きつける。切っ先がちくちくと当たって若干痛いのはご愛嬌だ。

ドアを開けて入ってきたのはえらく不機嫌そうな若い警官の顔。勤務時間外までの労働させてスイマセンでした、と心の中で謝っていた。これで許してもらえるよ、めいびー。

そしてから、僕を不審そうな目で見る。そして、隣（殺人少女、べったり張り付き中）のと見比べる。赤色のアクセントが素敵だね、とは言ってくれなかった。夕日の赤は色調を狂わせますし。

「俺にもチャンスあるよな」

独り言のつもりですか？ 残念ながらバッチリ聞こえていますし。僕はこんなチャンスありません、あなたに逆にあげたいです。てか



こんな体験してみます？ 冷や汗もんですよ（既に汗かいてるけど）。

「……えっと、君が××××君で良いんだね？ 今日の夕方のこと  
なんだけど」

僕の本名はオフレコでお願いしたいね。

それにしても、いきなり核心に触れてきやがったな。後ろに回された切っ先も気持ち、力を込めて押し付けられてる気がする。

少女は擦り寄ってきて、

表ver「ねえ、コーきゅん。今日はなんかあったの」

裏ver（おい……喋るなよ。刺すぞ、刺す、刺す、刺す☆）

表裏どっちも怖いのはさておき。

「えーと、そのとき僕は下校中ですね。なんかありましたか」

「いや、それがこれなんですよ」

と、いったん警官はドアの外に出てから再入場。我が愛しの自転車を取り出してくださった。肩に担いでいらっしゃる、ちっからもちー。

「これ不法投棄なのかな？」

ああ、そっちですか。明日、学校に行くついでに回収して行こうと思っただけだな、それ。

ていうか、その代わりに持って帰ったこの娘を不法投棄したい。クリーンセンターはどこですか？ ……もちろん冗句、冗句。

「あ、ありがとうございます……」

丁寧に座したまま礼をする、少女の頭も畳に伏せさせた。国には頭を下げておくに限るからね。頭はこんなときにしか使う場所無いし。

「あんなところにもう放っておくなよ。次見つけた時は、廃棄処分にするからね」

と若い警察官。業務どおりにあっさりと言いつけられた。しかし、その瞳には嫉妬と羨望の静かな怒りが宿り……これも冗句、めいびゝ。多分再登場すると思う、これは冗句じゃないかもしれない感じ。

「じゃあ、ここにおいていくからな」

と、おまわりさんはすっと手を上げて去っていった。気障な奴だ、嫌いなタイプって感じ。

「ご苦労様です」

と思っても無いことを口にしてみたら口がレモンをかじったときのように酸っぱくなった。嘘は良くないね。本当に。

## §7 無感動だ、無感動。(後書き)

こーしんしたよ！

この調子だと長編一本ぐらいの分量の連載になるかも。

あんまりストーリー（デイトール）も決まっていけないので、その場その場にかいていこうかねえ。

2010911

携帯からの皆様が見やすいように改行を入れました。

§8 危機！と喜喜？ まあ、僕としてはなんともいえないけど。

さて、警察も去った。なぜかこの少女をかくまってしまった。もう、犯罪だな、一步も引けねーや。（殺人幫助？）

「……さっきは、ありがとう」

殊勝そうに殺人少女が言う。（なにやらごそごそしているが何をしているのだろう、知りたくは無いけど）感謝の言葉を聴くのはこれが初めてだな。夜の澄み切った空気のように清らかな声だった（おそらく、美少女補正）。

「イイッテ、イイッテ」

棒読みで答えてみる、無感動にね。僕はあんな風やそんな風になびくつもりは無い。そう、そうだよ、僕のモットーは三無主義のはずなんだから。無気力に無関心に、ついでに無感動に生きるのさ。

つれないね、と『少女』。

早く名前を聞かないとな、『殺人少女』じゃ物騒すぎるっての、全く。『最終兵器彼女』ならなんとなくかっこいい感じだけど、って違うか。

『最終兵器少女』

まずい、余計ひどくなってる。起動させたら、地球全体が吹っ飛びそうだ。

『少女起動!!』したら最後だわ。

まあ、でも、誹謗中傷は良くないよね。まだ相手のことを良く分かってないのに……と、特に理由も無くい子ぶってみる。似合わねー。

「さっきの事だけど……」

その横で少女がレモンを絞りつ言う。すっぱい香りが部屋に広がる。さっきの『ごそごそ』はそれか。ってかレモン持ってたのか。あと、絞り器も常時携帯？ あの時（思い出したくない過去の意）、レモンの香りがしたのはそのせいかな。

それにしても、サバイバルナイフにレモンに絞り器、どこに仕舞っているのだろう。今度聞いてみよう。

「なん……ですか？」 心変わりは勘弁するぜ。

「何で私は捕まらなかったのかなー？」

「犯罪者じゃないからじゃないかなー？」

「そうなの、やったー」

「やったー」

「って、違うだろ」おっ、初ツツコミ、記念日にはしない。

「そうじゃなくて、私の顔は見られていないということでしょう？」

「まあ、そういうことになるな」

と、その通りのことをいって適応に相槌。

「よっかたー。見られてるか見られていないか心配だったから……よく分かんないし」

「自分のことなのに？」

「もー、うつしやいなー」

机の上のコップにレモンの絞り汁を入れる少女。分量を間違えないように真剣になっているせいでびみょーに舌足らず。どういうシステムか僕は知らない。

ところで、コップも取り出したのかと思ったら、こればかりは僕の部屋のを使っていた。

「分からないったら分からないのー。意識無いし」

「へっ？」

「うん？ なんでもない。忘れるべし！ 忘れるべし！」

？  
すごく大事な証言を聞いたような気がする。なんて言ってたっけ  
あれ？

「えっと、何故犯人と分からなかったかの話だったけ？ 存在感が小さいか……ら？」



思わず、語尾が疑問系になったね☆ 視線が。否、死線が突き刺さってさ……

「うっ……ソナメツタナコトヲイウベキデハリマセンデシタ。ドクシャサマニ、ココロカラオワビヲモウシアゲマス」

あっ、刺さってる、刺さってる。正面から膝にどすっと、容赦なく。

ちょっと今回は血が滲んでるんじゃないかな。ナイフの刃の冷たさが体の内部まで伝わって、すこし刺された人の気持ちがあった。全部を知るのが僕の歩む末路にならないことをただひたすらに願いつつ。僕は棒読みで詫びる。無論、脅迫によって成された自白は証拠とならないのと同じく、この謝罪も脅迫によるもの。ならば、この謝罪の真意はどういったものになるのだろう。甚だ疑問である。で、ド・クシャっなんのこと、料理とかお菓子っぽい名前だけど。

「小さい、言うなあ」

「さっきのは関係ないちゅーに」

その言い方が小さく見えるんですけどね、人間的に。っていうか

器が小さいと普通に言えばいいのにと、思う人も居るかもしれないが。勿論、意味はある。文字数稼ぎだ。……さっきから口からデンパな台詞が出てきているのは気のせいだろう。

「コー君がいじめる……」

「いきなり親密な中になったなー、おい」

「まっ、いいんじゃないっすか」

「既に相当の年来の入った友達に!？」

「じゃあ、チューしよっか」

「知り合い未満でいたかったっ!」

……友達以上恋人未満ってあった気がするけど、知り合い以上友達未満のシチュエーションの方が多いんだよな。告白するのは大体そんな感じだし。イヤ、ボクハシリマセンガ。

ともかく、僕がよく分からない状況に陥りつつも、少女の危機は

去ったらしい。ということは僕の危機が続くこと（毎日、同じ人に告白して振られる位の）とイコールになるのだけど、“えきさいていんぐ”な日常も悪くは無いと思ってしまった僕がいた。（美少女補正）

そうはいっても、恋愛観念も僕の場合は枯れてしまっているわけで、人道的好奇心からこの少女を見ている僕、めいびー。どちらかというと保護者に近い。とはいっても保護者にしては煩惱に犯されているような気もしつつ。保護者らしいことを口にしてみる。

「今日泊ってどこあるの？」

あ、煩惱にさいなまれてる自分だ。

「今日って言うか、毎日無い気がするっすねー。っていうか気がするって言うより、そのとおりなんすけどねー」

恐ろしい女子だった。風呂やらなんやらはどうしているのだろうか。年齢は知らないがどうせ僕と同じくらいだろう。……同じくらいと思ったのは、あくまで僕の主観であり、他の人が見るともっと幼く見えるかもしれない。人は外見が九割なのだ。

ってかなんでこんなまた馴れ馴れしい喋り方になっているんだ、

不満。

知り合い以上にはなりたくないのだがと、提案……はしない。それじゃあ、つまらないから。

「……だから、今日は泊めてもらえませんか？」

「……………」

返答が詰まる。いいのかそれは？ 年頃ななかの女の子的に。

「大丈夫です。風呂には入れればいいです……って、ここ風呂無いんでしたっけ！ あわわ、どうしよう。二週間もお風呂はいつてなかったら、さすがに不味いって」

確かにそれは不味いね、ウン。レモンの香りはその為だったのだろうか。ベルサイユ宮殿の貴族たちの香水か、平安時代の貴族たちのお香のようなもの……なのか？ 彼女にとっては。

「シャワーだけならあるけど」

「十二分です。入らしてもらって良い……ですか？」

「どぞー」「やったー」っていうノリで軽くおっけーを出してみたのだが、そういえばこの部屋脱衣場が無いんだよね。

少女がじっと見つめる。ってか明らかに物言いたげな顔をしている。はいはい分かりましたよ、出て行きますって。

四畳半の部屋には脱衣場なんて無いわけで、僕はいつも居間(?)で着替えている。居間の狭さは一人が身体を伸ばすのにすら苦勞するような狭さだ。その害としてさっきから二人でいる間に感じていたのが暑い、暑いのだ。ヒト二匹の排出する熱は部屋の窓から時折入る風だけではとてもじゃないが冷えるものでない。

僕は夜風に当たるべく、戸外に出た。

§8 危機!と喜喜? まあ、僕としてはなんともいえないけど。(後書き)

・書き終えて一言

脱(r y フラグキター(。v。))ー!  
むふふ、ですw

ちょっと書いてみたけど、

この章の後半部分は、連載初期の丁寧さに戻っているかな?

まあ、自分の信じた道を行きますがw

少々、読みにくくても、読者様のパーフェクトな読解力でカバーしてー(T T T)

## §9 立ち上る湯気と無計画 ディレクターズカットver（前書き）

殺「この頃作者の怠慢には目を疑うというか、ほじくりだしたくなるわね」

コー「まあ、大変なんじゃないかな？ 作者も？ めいびー」

殺「金曜日にテスト終わったぜひゃっほーいとか書いていたのに？」

コー「大人の事情って奴じゃないでしょうか？」やや確信を持って

殺「まあ、人付き合いもあるしね。土日月は全部文化祭の打ち上げ（科学部、創作部、クラス）だったらいいから。許してあげても良いけど……」やや妥協。

コー「だけどねえ？ だけどといえばディレクターズカット版って言うのが良くわかんないんだけど？ なんかあった？」

殺「／／／」

コー「なぜ、そんなに紅く？」若干血の色。まっ、当たり前だけど。殺「平行世界に消えた、あのシーンの数々私は忘れないわ……」

・作者

R15上等！！！ も不味いと思った。んで、カットカット。期待するほど、カット前もエリョクなかったけどな（。▽。）

## §9 立ち上る湯気と無計画 ディレクターズカットver

……かといって夏の夜はそう簡単には涼ませてくれない、蒸し暑い空気がベターと体中にへばりつく。それと、対照的に家の中から聞こえてくる水音は清涼感をセミの鳴き止まぬ田舎の一所に思わせられた。

……………

このアパートには大家のほかにも住人はいるのだがこの生活感のなさは何なんだろうか？ 生活音の一つもしないとは。

「おぬし、伊賀の者か!？」

と言ってみたり。

……………

でも、これだけ生活感が無いと不信感すらおぼえるな。みんな孤独死しそうな人ばっかだからな。近所づきあいが（僕も含めて）無いからね、このアパート。……大家在アレじゃあしょうがないか。その大家って言っても、遺産相続か何かで譲り受けたらしくって、四月に来たばっかだからいちいち頼りない。

『今月の家賃もって来ました』

『あ、ありがとね……って一万少なくてね？』

『あってます。家賃ぐらい覚えてください』

見たいなのがバージョンを変えてしょっちゅうあるのだ。これでどこのどのあたりを頼れと？ 頼るところねー。



やがて、水を惜しげなく使っていたシャワーは止まり、ドアが内側からノックされる。僕はそれを部屋に入っていいという了承の合図と受け取り、ドアノブを回した。

「入るぞ……」

入るといきなり、ふんわりとレモンの香りに包まれた部屋。けだるい空気のようにそれはまとわりつかず、僕を優しく包み込んだ。至福？ 安心感？ 人の匂いをこうも肯定的に受け取れたのは久々のことだった。いつ以来かは知らないけどさ。まっ、そんな感じ。

「……」

「# \$ % &」  
（\$ # \$ % & ,  
! ! ! ! ! ! ! !  
」  
（殺人少女）

シセン（例によって死線）ガアツタ。

見詰め合う二人の間にはレモン色の空気、それ以外には何も無かった。特に少女の方にはコー君（三人称にしてみた）の死線を阻む物は何も無かった。放浪していたとは思えないような、華奢な身体にワンピースから出ていた部分だけ少し日焼けした体軀。それが何にも阻まれること無く晒されていた（大事なことなので二度言いました）。無駄の無い、無駄じゃない先鋭的なそのフォームは滑らかに外界との境界を現している。その境界線はその放つ香氣と立ち上る湯気によってぼかさされたが、その0.3秒後“少女”は顔を赤らめ。色々とバスタオル（僕の奴ね）で隠した。

白磁のようになっていうのはよくあるけど、少しの日焼けとはいえ、まさに白磁の紋ようだった。っていうか芸術だねっ！

「リーンチ（私刑ってか死刑）・チャーンズ（好機ってか狂気）！」

「！！」  
（殺人少女）

「%\$#\*+~|||——○——  
 |——（悲鳴というより断末魔）」（コ  
 ー君）

「zzxでrcfvtygb yhぬj巫女、l。；・…；jhgf  
dtr えdf rty 婦人mk、kジョイ不bnkm、。・@おp

j..k m l、j h日印l m；、m m j部位h j家w d 9 8 0 fへ9  
d k gあv mれう9 pビオg v 3 4不意k l d f m b l g、b j m  
s s b n f祖b n d k s m b s s n d g、s k f；g d s」

聞きつけた隣の大家さん（再登場）が玄関から顔だけ出す。

「うるさいよ、パトラッシュ。なにやってんの、家に可愛い女の子連れ込んで？ 一人だけ抜け駆けはだめだよ？」

と、唐突に登場の大家あんど女子大生の八桜さん。近所迷惑スイマセン。

あつ、パトラッシュは僕のことね、一緒にフランダースの犬を（無理矢理、八桜さんに）見さされたことがあって、「ぱとらっしゅ」って八桜さんが抱きついてきたのが始まりな感じ。結局僕は感動できなかったんだけど。

ってか、ご近所関係あるじゃないか、僕。と一人突っ込みを入れてみる。物悲しい。が、この大家までご近所に入れる必要はあるか？ いや、普通にあるんだけど……立場上？

（ねえ？ そこに誰がいるの？ 服貸してもらって頂戴……）

と、小声で囁く、殺人少女。

声で女性って分かったのか……。

玄関から顔だけにゅーと突き出した姿勢のまんまの八桜さん、若干間抜け。おかげで（殺人少女との）関わりを持ってしまったようだ、可哀想。

（ホワイ？）

と視線で会話。声が出せないならアイコンタクトで語るのみ。

（服洗っちゃったんだよねー。洗濯大事！）

片手でタオルを固定したまま、ビシッと指をさされた。センチタクが間違っている気がする、替えが無いなら洗うなっちゅーに。

大体、『女の人に服貸して』なんて言える男子がいるかよ。言っちゃったたら、アレだぜ？ へんたーいじゃんか？ 多分。

と、僕は一般的な高校生の考え方で状況を判断したわけさ。  
でも、あれ、なんで『殺人少女』さん、ナイフ構えてるの？ も  
しかして投げナイフ？ あのごっついナイフで？ いや、冗談だろ  
う。

僕が何かに関心を持つのと、殺されかけると両方の確率ぐらい  
ねーよ、そんなもん。

でも、実際、殺されかけるのは起こってからな、洒落が洒落にな  
らねえ。大体、現在進行形で殺されかけてるし。

ここは……

いや、しかし、それはいいのか？ 男として不味いのではないだ  
ろうか……えっ、うーん。

はっ！

「あの一、服貸してもらえません」

言っちゃった。ご近所づきあいより命が大事、これ確か。

「……………」

八桜さんがぼーんとしてる。

「ご、ゴメンません。変なこと言っちゃって。実はその今家に来て  
る友達が……」

ゴメンません！ スイマセン！ ごめんなさい。新境地開拓！ する  
つもりはないんだけどね。

「い、いいよー。パトラッシュの彼女なら私の彼女だし！ 身内に  
服を貸すのと変わらないね♪」

満身の笑みで答えてくれても彼女じゃないんだけどね！ でも、  
この際どうでもいいや。首の皮繋がればいいと思ってるから。

生命の危機の回避、これ一番大事だかね！

「で、何がいの？ 私の着てた制服でいい？ ってか私も彼女欲  
しい、くれくれ！」

……やるよ、最優先事項でくれてやるよ……。しかも、彼女じゃなくて、あなたは彼氏を探しといてください。

「普通の恋愛には興味ありません。以上」

色々、すっ飛ばしやがったこの女郎めづう。いい加減にしろよ、そのなまぐさ根性。「しかし、不肖八桜はその信念を曲げることなく。わが道突き通すことになるとは僕はまだ知らない」。

「そうか、私にはそんな未来が待っているんだな」

「ああ、もう、うるせー」

なんか見ちゃダメなところも見てるし。僕の独白は小説みたいには読めませんって。デフォルトでは。

「しかし、管理人権限をつかえば読めるのらー。必殺、住民のプライバシースケルトン光線！」

腕を十字に組んで、三分間しか戦わない点でこの八桜さんに似ているヒーローのまねをしている。スケルトンというからにはカルシウム光線なのだろうか？ 全くどうでもいいことだけど、めいびー。

（で、ちょっと服はやくしてよ！）

目だけで急かされた。アイコンタクトを取れるなんて、意外に二人は気が合うのだ。自己嫌悪丸出しで嘘だけどさ。

## §9 立ち上る湯気と無計画 ディレクターズカットver (後書き)

折角のサービスシーン張り切りすぎて、自重したorz

まだまだもちろん続きます。

## §10 霧と霧 過去と今（前書き）

テーマ…作者の怠慢について。

殺人少女（以下少女） 「作者しんじゃえ……」

こ↓くん（以下コ↓） 「ちょ、すごい暗い」

少女 「だって作者更新してないからどんどんお気に入りが減ってくんだよ……」

コ↓ 「……」

少女 「私の世界進出が送れるじゃない！」

コ↓ 「……！ ってかそんな計画があったことに驚きを覚える……！」

少女 「今作った」

コ↓ 「やっぱり！」

少女 「黙れ」 ビシュ——

コ↓ 「あ、あつぶねえ」

少女 「ふんっ。口を慎みなさいな。命が惜しいならB」  
コ↓ 「理不尽だ！」

PS

殺人少女 「なんなのよ」

こ↓くん 「ん？」

殺人少女 「なんで、少女って打とうとしたら。処女になるの！」  
こ↓くん 「知るか、んなもん……」

## §10 霧と霧 過去と今

「コー君、サンクス」

制服ってなんだよ。思いのほか似合ってたから、危うく、見蕩れかけたじゃないか。

「霧影高校の制服ってこんな感じなんだね。私の高校とは制服のラインの色が違ってるぐらいかな？」

八桜さんは霧影高校のOGだったりして、今だ制服を置いていたりするらしい。

ごくフツのセーラー服に紺色のラインが二本入っているのが、霧影。一方で白いラインが二本は言っているのが霧ヶ丘。

対照的といえば対照かもしれない……というぐらいの違いではない。

そういう、霧陰高校は何年か前にある重大な事件を起こしている。政府らによる報道管制により、ただ重大な事件とだけ報道されたそれは衆の記憶からは薄れてきている。

内部で大変なことになっていた、霧影。

一方、外部（連続殺人事件）で大変なことになっている霧が丘。対照だな。忌ま忌ましいけど。

……その理由だけでなく、個人的にこの制服にいい思い出はないのだが、

『わー、もう老化が始まっちゃってるわ、私。制服を着たら若かりしあの日に戻れるかしら？ ってことでどう？ ぱとらっしゅ？』

とか、駅でいきなり

『おっはー、○○君（僕の本名はプライバシー保護のため伏字）♪』とか制服姿で言ってみたり。碌なことが無いね、あの女子大生。

「へえ……因みにお前の通ってる高校は？」

まず、高校に通えていること事態が疑わしい彼女である（身体的に）。通えてるのか？ こいつ（社会的に）。

「霧ヶ丘だけど……?」

「え?」

「きりがおかですー!」

「実は同じ高校でしたとかどんな話だよ!」

「こんな話っ!」

と生徒手帳を制服のポケットから取り出す少女。何故もう仕込んでいる……。制服だとポケットがあるけど……。ワンピースのときはどうしてたんだろうか、きになるなー。サバイバルナイフとか、搾り器とかかさばるのにどうやってるんだろ。

県立霧ヶ丘の校章が描かれた表紙、そして顔写真入りのIDカード（無駄にハイテクである）本名はカードに映りこんだ蛍光灯の光で見えなくなっている。

謎多き姫は美しかったりするらしいけど、不信任が先行するような謎はいらないと僕は思うんだけどな。

まったく……。

「だから、初めての登校は一緒に来てよね。そうだ、あんた……。じやなかったコー君の幼馴染だっていえば怪しまれずに済みそうじゃない?」

一瞬、血まみれの制服を着た女子生徒と登校する、血まみれの自分という構図が浮かび上がったのは気のせいだろうか、いや気のせいではない（反語） ないだろうけどー（やや、不安を込めて）。

「だがしかし……」

「?」

「なぜ僕の幼馴染だと怪しまれないと思うんだ?」

「ふいんき? なぜか漢字分らないけど何故かなー?」

ひどい理由だった。聞かないほうがマシだったな、全く。

「私がかっこいいと思うよ? 裏に影がある少年って♪」

「僕はそんなプロフィールは無いつ!」

確かに、高校生が親元を離れて一人暮らしってのはかなり後ろ暗



さを感じるけど…… それにはちゃんとした理由があって、僕はその理由に流されてきただけなんだって。親元を飛び出してきたとか、むしろ追い出されたとかそんな積極的活動僕がするわけが無い。それは三無主義に反するものだし。

「もち、嘘だよ。決まってるじゃん？」

「ならよかつ……」

「つてのは嘘だけどー」

「ぬわにっ」

「じょーくよ」

「芸風ぱくられた」 (いや、もともとパクリだってさb y作者)  
ってか芸風ってなんだろう？ やれやれだ。

「とりあえず、学校は一緒に登校してよね？」

有無は言わせまい。

そう、ナイフが告げていた。

## §10 霧と霧 過去と今（後書き）

この連載小説は未完結のまま約2ヶ月以上の間、更新されていません。

→の文字でようやくヤル気になりました。サーセンW  
やっと学校編に入れますぜ、だんな。

新キャラも用意してあるのでそれが書きたいから更新頑張る！

## §11 朝、異常。

現在午前七時前、昨日はぼろアパートの外で寝かされていて身体の節々が痛い。

「朝ごはんはパンにするー？ ご飯にするー？ それともわ・た・し？」

殺人少女が振り返り最高の笑顔を浮かべる。

「いや、勝手に上がりこんでわるいから、勝手に作ってるけどいい？」

大体八時に学校を出れば間に合うこのアパートなら普段八時前とかに起きてしまう。人は何故こうも、余裕があればあるほどその余裕をなくし、わざわざ切羽詰ろうとするんだろうか、全く面白いものだと思う。……これはつまり人生生き急ぐなってことにも繋がる気もするから結局は生き方として正しいのだろう、めいびー。

そして、もちろん死に急ぐこともない。

「いいけどさ。なあ、少女よ。そのナイフどうにかならないのか？」  
朝日きらめく部屋の中で一際輝くものが少女の手には握られている。もうアイデンティティなんですね、よく分かります。大体、料理するときぐらい包丁使えよ。

「これは私の存在証明だから無理」

「無理って何さ」

「無理な物は無理っさ」

もう、その話は無かったかのように殺人少女は台所へとついつと向き直った。しかし、アレである、制服に三角巾とエプロンという調理実習の時のような姿を見て、少女の中にも学校に通う日常というのがある（あった）のだろうと今更ながら考えさせられる。慣れた手つきでスクランブルエッグを作っているところもまた違和感を覚えてしまう。

昨日の非日常者（造語）が日常者（造語）のそぶりを見せている違和感。

いや、日常が正しいことなんだけどね。昨日のはずれ具合が酷くて価値判断の基準が狂ったのかもしれない。問題だ、全く。

デーデーデー

デーデーデーデー

あ、やっぱり非日常者だ。

「いず・でいす・すくらんぶるえっぐ？」

「いえず。でいす・いず・すくらんぶるえっぐ。はっはー」

期待に反したのか、沿ったのか卵自体は普通だった。

でも、これ何作ろうとしてたんだろ？ ス克蘭ブルエッグって調味料入れないの？ 偉くプレーンな味だった。

それと惣菜パンを黙々と食べ進める、二人。

「そろそろ、学校行きましようか？」



まだ、七時半だ。

徒歩だから、今日は早めに家を出た。

まさか、女子を歩かせて自分は自転車なんてことはできまい。さすがの僕もそれぐらいの良識はあるのだ。

昨日、僕の襲われた場所に行き当たった。そこに、今日、白墨で人型が書いてあったかもしれないと思うとゾッとする。そして、となりの少女を見やる。今更ながらの恐怖、戦き、戦慄……今まで、感じ無かったというのもおかしい話だが。……今感じた。なぜ自分は流されるまま一緒に行動している？ 疑問の答えは三無主義にある……

## §11 朝、異常。(後書き)

ちよつとだけ書いたのよさ!

そーそー、実は殺人少女漫画化してますw

こちらのURLからどうぞ。 <http://www.pixiv.net/member/illustration.php?mode=detail&amp;pid=15249286>

um&amp;pid=15249286

ラリエルさんのステキな絵で殺人少女が再現されております>w<

## §12 緊張死感

まさに無関心。

これからは、もう怖いやら、恐怖やら、この娘から感じることは無いようになるだろう、僕がそうなるから。

これ以上僕は惑わされない。

なんて、すでに惑ってるところがかっこ悪いよなとは自分でも思う。まあ、それもそれでいいのだろう何がどうであろうと関係ないさ、何でもいいのさ。



「おい、おまえここから先は自分で教室行けよ」

「はいはい」

そういつて、自転車置き場に向かうのだが、自転車を止める場所が場所である。

一年×組

そうか、因果つてのはこんなにも皮肉か。僕と彼女が同じクラスとは全くどういうことだろ。数奇なもんだね、人生は。何が起こるかわかりやしない。

「グッモーニン」

何が起こるかわかりやしないといえば、この先輩も分かりやしない。流暢な発音で先輩が挨拶してきた。そのへんの……雰囲気だけ令嬢である。でも、令嬢で有るか無いかは僕基準だからよくわからないんだけど。

「おはようございます、先輩」

「いいよ、そんな堅苦しいのは。名前でもいいって」

「いいんですか？　じゃあ、東咲」

「そんな、照れる。って今日は自転車じゃないのか後輩」

名前呼び許可はこれでもらったってことなのだろうか？

先輩の名前は久望束咲。身長165ぐらい、ちょっと高い部類に入る体格の持ち主である。

「壊れました、先輩」

「直してもらえばいいじゃないか？」

「めんどーです」

「歩いて学校来る方がメンドー」

「僕は目の前のめんどーより、あとのめんどーを取りますので」

「こうやってダメ人間が形成されていくわけか……」

どうも、ダメ人間です、反省はしてない。

「じゃあ、あでいおす」

先輩がチャリンコで走り去ってりまう。

……その後、僕がそのまま教室に向かうと、教室にはまばらにさりげに大体人数が揃っている。

僕が教室に入ったとき、どっ、というどよめき。一瞬、自分が何かしでかしたのかと思ったがそんなはずはない。そう、それは、

僕の真後ろにいる彼女に向けられたものだった。

今一度、容姿を確認しよう。

ぱっと見、聡明、近寄りがたいほどの美なんちゃら。

長く伸ばした髪は腰にかかるぐらいの黒髪。

滲み出す異常。

そして、ぺったんこ。

高校入学してからというものの一度も顔を見せずに居た彼女は皆の記憶にはそもそも存在していなかったが、今その存在が焼き付けられた。焼きつきついでに男子の焼きつくような視線も熱い。焼け焦げそうであるで熱線じゃないか。

大勢からの視線を一身に受け、戸惑っている様子の殺人少女。

ギユ

クラス中皆がポカーンとした。僕もポカーンとした。

ギユギユ

少女が後ろから僕の腕に抱きついている。

ギユギユギユ

視線が痛い。

ギユギユギユ……………ザクッ☆

最後の何！？（「サービス？」 「それは違う」 「なら何？」 「手のひら返しという」）

死線にさらされるのは今日で二回目だなど、嬉しくもない事務報告。

「えー、××君、実はやりてだったんだー。休んでるこの家に行って仲深めたってことでしょお」

「××のやつ、なんだよ。普段目立たないくせにあんなの掴まてるなんてよ」

「私、××君のファンだったのに……………幻滅」

え、気にしないけど。気にしないけどそれはちよつとショックかもしれない…………。



## §12 緊張死感（後書き）

おひさしぶりです。

しばらくぶりなんですけど、ずいぶんスランプというか書きたくない状態が続いてました。やっと書けた、って行って推敲もせず投稿したのでまた直さないとと思う午前三時では

### §13 死活的部活

視線が痛い教室での僕の席は幸いというか殺人少女の動きが見えて、ナイフ（ギラッ☆）が届かない、斜め後ろだった。横顔もみえてばっちぐー。

朝のHRの時間、先生は殺人少女を見て珍しいものを見たと同時に、かわいそうなものを見たという表情をした。まあ、仕方ないだろう、生徒とはいえ初対面だ。生徒というより、事前情報のみの知らない誰かなのだからそんな表情は簡単に作れるのだろう。中一シヨックの高校生バージョンというのはあるのだろうか。中一シヨックというのは小学校からぴっかぴかの中学一年生に上がったときに不登校児が増えるという法則で、おもに学期始めの環境の変化についていけなかったというのが大きい。しかし、それでは彼女はないだろう、彼女は今日始めて学校に来たのだから。では、何故？ 理由は色々あるだろうが、志望校に落ちて泣く泣くこの学校に来ざるをえなくなったからそのシヨックと雪辱でこない場合もあるだろうし、家庭内の事情、そう例えば“不幸”があった場合も同じくだ。そんな、不登校児が真っ赤に染まったワンピースを着ていたというのはおかしな話である。意気消沈した状態でそんな“アグレッシブなこと”ができるかよと。

「ああ、ちよつと」

HRが終わったあと教師が手招きして言う。彼女はそれについていく。経緯を説明しなくてはならないのだろうね。野暮なことを。

その後帰ってきてからの殺人少女の教室での振る舞いというのは至って平凡なものであった。

そもそも奇抜な振る舞いがあるものの、理性は一般市民のそれであり社会生活をする上でのマナー・モラルは守れているように思える。……まあ、だいぶ数学には苦勞していたようだが、

「はい、後ろの君、これ解いてみなさい」「わかりません」  
休んでたのに分かるわけがないだろうに。

「ふざけちゃダメだ、ほれ」「わかりません」

「今までの授業聞いて居たら分かるだろう？」「……………」

だから、その子休んでたんですって言ったほうがいいのか、これは。あの数学の先生本当に何にも知らなさそうだし……

整然と立ったまま問いに答え続けている少女だった。

だったのに、ついに涙で目じりが濡れていた。

「なあ」

僕は休み時間に声をかける。

「ん？ あれは悔し泣きだからな！ 別に困惑して混乱して錯乱して頭がいっぱいになってそのまま乱闘とかに貴様が言わなくてもならなかったんだからね！」

言い訳のように見えるが本当。目のガラガラ度からして、そう……  
… なんていうか、もう呆れる。

「そう、ならいいけど」

自分もアレもダメ人間だなあ、かける言葉も無いや。



教室がざわざわとし、徐々に人気がなくなる教室。

授業の終わり、日は高く、外は暑い。

そして、二人しか居ない教室。実に青い春らしい、実際は紅い春だなんて、信じられるだろうか？

「あのさ、コー君は部活やってるわけ？ ここの部活まだ見たことないから見てみたいんだけど、見せてよ」

「ああ、別に」

よく、こういう青春小説なんかで用いられる手法がボーイミ

ツガールというものだ。その物語の終着点は出会った、二人がお互いくっつく、つまり付き合うということなのだがボクにはそれをゴールに終わらせてるのは使い古していると思っっている。

ボーイパーツガール、別れる話って言うのが存在してもいいんじゃないか、と。

特に今回は、訳が分からない状態でいつの間にか出合った分、これから別れていくという方向で物事が進んでいくのが自分の将来からしても希望するんだけど……

手遅れにならないうちに早ければ早いほどいい。

……なんて、思いながら案内しようという気になっている自分は甘いのだろうか、ふむ。

僕は彼女を部室まで連れて行く。

文科系部室棟二階、西向き、日当たり悪し、角部屋。

軋むことすら間々ならない、さびてぼろぼろと崩れ落ちる外付けの階段と吹きさらしの廊下が唯一の通行手段な幽霊部室へと。

「ひなびてるね」

「しょうがないよ、築うん十年みたいなぼろ建築だから」

「ちがうちがう、ひなびてるのは今の君の表情」

「あー、いや、まあね、疲れるから」

先輩がなあ、ちなみに朝会った人。

「？」

「疲れさせられるというべきかもね」

「それ、あれかな、も、もしかしてそういう意味で言ってるの。私の貞操が危ない、どうすれば」

「……何故か僕が変態にされていく、うわあ」

「何故かじゃないって、最初っからそうだと思ってたし。独断と偏見で」

「……」

「ところで、コー君ここの部室他に人がいないのはなぜかしら？」

「新しい部活棟があるからだよ、わざわざこんな古い部室棟にはみんないかない」

「じゃあ、来ちゃうコー君はあれか廃墟マニアってやつ」

「当たるとも遠すぎる」

「さっさと、クラブ紹介してよ」

「はいはい、あれ？ 開かない？ え？」

「開かない」

いや、いると思ったんだけどな、鍵も事務室にかかってなかったし？先輩中にいるんじゃないんですかと？ おっかしいな、おかしいな、あれ？

どうよ、ドアの窓から覗くとかどうよ？

……

ああ、見なかったほうが良かったかも。

うん、先輩が赤い制服着て、椅子に縛り付けられて、ぐでーってしてる。※制服は赤でない

### §13 死活的部活（後書き）

いやっふうふうふう夏休みだぜけどクラブ忙しいし補習も熱いぜ！って訳で更新です。

すいません、何かそんなに書いてないのに一年以上たっちゃいました（´。Д、`）

## §14 花（プライド）より団子（〇〇）

繰り返そう制服は決して赤でない。

この場面で何が起こったと普通考えるだろうか。おそらく、“うわやっべえ警察呼ばなきゃ”だろう。しかし、しかしだ、僕ほどの状況に慣れていると話せば別だ。

僕は、すぐさま校舎を飛び出した。殺人少女併走する。僕、あんまり体力に自信あるって訳でもないんだけどな、殺人少女のタフネスというか、スポーツマンチックなところには驚く。人が全速力で走ってんのに、涼しい顔しないでくださいよ。

「ねえ、なんで事件の香りから逃げようとするの、コー君」

「それは、事件より君と過ごす時間が大切だからさ」

「わーメロられたー、コー君がメロったー、昼ドラたじたじー」

「……んなわけあるか、って」

僕が現場から走り去ったのはあの部屋の異常な状態をあるべき姿に戻すためだ。そのためには商店街であるものを手に入れる必要があった。商店が商店を呼び集まり固まったもの（商店街）、そこには今回の異常を解く鍵があると僕は気付いた。

商店街の一角、寂れた店の前で僕は立ち止まった。

「おばちゃん、アレ一つ」

「あいよ、中身は誰にも見られないようにね」

人目をはばかる様にして渡されたそれは長く太い箱に入った何かだった。

「それ、なに？」

「んっと、極秘かな。これは外部に漏らせない情報だからね」

「コー君、意地悪っすな」

「これもおばちゃんのためだよ」

「これで殴るの？ ねえ、武器？ これ」

「……………」





「って、なんでこんなこと僕がしなきゃいけないんですか」

「後輩だから、先輩には奉仕しないといけないんじゃないのん？」

普通椅子に縛り付けられた姿勢で何を求めるのは、それは開放だろう。それを要求せずにむしろそのままで色々奉仕しろだなんてね、括弧笑い。

「先輩、どこからどうみてもアルファベットの13番目なんですが」

「もしかして? ……S」

「どう考えても違います」

「嘘っ! 私、英語の成績5なのに、ショックだわ」

「意外とがちでアレ!？」

「うん、ガッチガチついでに後輩もガッチガチだな色々」

「緊張とか、この先の不安から先行きはガッチガチですね、はい」

「後輩、素直になりなよ」

「なりなよー、コー君」

さっきからはたで聞いていた殺人少女が初の意気投合↑人見知り

「何にさっ!」

「「欲望?」」

「ほらほら、なんかこう女子高生が椅子に縛り付けられてんだよ?

こう感じない?

「自分でくりつけたって時点で何も思いません」

「いけずだなー」

だって、嫌でしょ? こんな人。何故僕の周りにはこんな変な“

お姉さま”しかいらっしやらないのだろうか。

丁度半分ぐらいまで栗羊羹が先輩の餌になったところでぼくはその手を止めた。

「ん、残りはいつもどおり後輩の分だね。姉さんにも分けてあげるのが宜しくてよ」

あ。そうそうあのアパートの八桜さん、この人の姉なんすよ。紆余曲折があって。あのノリとこのノリのが何となく似ているのはそのせいっしょね。

八桜・束咲姉妹。この二人は数少ない僕の人間関係の中で僕のポテンシャルを狂わせてくる、特別な存在なのである、って棒読みライクに言ってみる。

## §14 花（プライド）より団子（〇〇）（後書き）

夏休み何にもないまま終わったよ、皆さん有意義に過ごせました？  
人はやる気がなければなんとでもgdgdするのだと実感した夏でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5543m/>

---

無気力で無関心なボクと殺人少女

2011年10月7日13時58分発行